「ちいとも、こわいことあらしまへなんだ。それで、廊下でボンさんが呼んでる声聞きながら、家内をひとまわりしましたんや」
どの部屋も、人手に不自由はないだけに、きれいに荷物は運び出されている。よねはひとまず安心しつつ、直吉の部屋まできておどろく。何も手をつけず、そのままだ。高知の母から届いたばかりの柳行李や、手まわりの品もそのままである。
「これこれ、火事やというのに、直吉はどこへ行ったんや。荷物も出さんと」
よねは、庭に向かって大声を出した。声を聞きつけた近くにいた一人がかけより告げる。
「直吉さんだっか。あの人はいま向こうの屋根へ登って、一生懸命水かけとってです」
運よく、このとき鈴木商店は類焼を免れた。よねが店の継続を決めたとき、表向きは女主人と言われながら、仕事に関する一切に口出しはせず、経営のすべてを直吉と冨士松に委ねる道をひらいたのは
「やっぱり、よかってんな、とあの火事のときも思うたんや」
「お家さんのおメガネが、正しかったんですわな」
当時四十代の義一氏は、よねの追懐談の重要性に気づき、すぐメモにして残している。
直吉のお家さん（この呼称も直吉が決める）に対する忠誠心のただならぬことは、関係記録書にもあきらかだが、以上のいきさつで、よねと直吉の信頼関係がほぼ理解できる。
明治三十五年（一九〇二）までの栄町四丁目の鈴木商店は、倉庫を兼ねていた。畳敷の店の間の一隅に結界があり、のれんをくぐった奥の間によねがいた。

二十人余りいた店員たちは、二階で寝起きしている。一度鈴木の店に入ったものは、ひとしく上下の別のない家族主義的な店風に感動するのが常だった。
お家さんと呼ばれ、新聞には〝尼将軍〟などと書かれもするよねをはじめ、大ボン、小ボンといわれる二人の子供、大番頭から使い走りの丁稚まで、みな同じものを食べた。一つ屋根に寝起きした。おやつも同じものだ。それはいつもお家さんが時間をかけ弱火で丁寧に焼いたカキモチであった。ときにはそら豆の煎ったものも出た。そら豆を煎るのもお家さんでありカンカンに入れて常備されていた。当時年商は軽く五百万を越えていた、というが、女店主の節倹ぶりは、変らなかった。
「夜おそうに、夜泣きうどんの屋台が表にきまっしゃろ。ほいたら若いもんが、こっそり外へ食べにいきよりまんのやけど、それがお家さんの枕もと通らないかんよって、そろっといくんでっけどな。帰りに枕もと通ったら必ず、誰や、てお家さんに名前聞かれるんですわ」
義一氏は、このころはまだ幼童であり、父冨士松に聞いていた話である。
ロシヤパン売りもよくやってきた。竹の鳴りものをカチャカチャ鳴らしてくるので、店員たちは、カチャカチャがきた、と私語しあった。ロシヤパンも白くほんのりと甘く、魅惑の食べものだった。
「ある日、浅田ちゅう後の支配人が、京都まで使いにいきましてん。土産に千枚漬たくさん買うてきよりましたんや。そしたらその晩のごはんが足らんようになって、お家さんがえらい怒っとりましたわな。お前はんが千枚漬なんか買うてくるからや、ゆうて」
これは義一氏自身の記憶である。

「わたしらも、よう叱られましたけど、やっぱり新米のボンさんほどよう叱られましたわな」
几帳面なよねの性格がうかがえる叱言だった。
「使いにいったら、さっさと帰ってきなはい」
「呼んだら、すぐ返事しなはい」
掃除の仕方については、とくにきびしかった。障子のサンを指で撫で、ホコリが少しでもつくと怒る。女中が二人いたが、よねも一しょになって店員のごはんをつくる。
よねの好物は、チリメンジャコに大根おろし、塩鮭、漬物といったものであり、この好みは千代子氏に引きつがれている。
「ひとつだけ、いつもほめられてたことがありましてん」
それは義一氏が三歳年下の千代子嬢をお守りするときだ。
「上手に守りができまんな。気が合うてよろしな」
庭で遊ぶ二人の子供を見て、よねは笑顔になる。二人の子供は、富山の薬売りがサービスでくれる四角の紙風船でよく遊んだ。紙風船は、いつもよねがくれるのである。女中たちが守りをすると、大抵叱られた。千代子がぐずるので。
よねが店主となって二年後、はりきりすぎた直吉は、樟脳の空売りで、店を危機に追いこんでいる。だが、よねはひたすら詫びる直吉に小言ひとつ言わず、
「ええがん。あんたが店のためにええと思うてしたことや」
逆に慰め、自身は実兄の西田や大阪辰巳屋と善後策を講じている。直吉の捨身の戦法が、このとき効果を現わし、何とか危機を脱したが、よねの姿勢は直吉をはじめ店員一同に異様な感銘を与えた。

「お家さんの直吉はんへの信頼は、口だけやなかった。えらいお人や、鈴木は働き甲斐のあるとこや」
失策を恥じた直吉は、処理精算に、寝食を忘れる。もともと風態をかまわなかった直吉の姿は、ますます人目をそば立てるものとなる。
「―しかしこの商戦で直吉は多くの教訓を得る。投機はカンだけではダメ。世界経済の動きを的確につかむ情報と、そのために政府に食いこむ〝顔〟が必要だ。この二つのポイントが金子のその後の経営戦略になった―」
（『海鳴りやまず』第一部）
その後の台湾樟脳販売権六十五パーセント取得は、時の台湾民政長官後藤新平を射落とした直吉の手腕だった。
明治三十六年には、九州の大里に地の利を十分考慮した製糖所を二百五十万の巨費をかけて作り、四年後六百五十万円で売却、その際鈴木による砂糖の一手販売権も取ってしまうという、離れ業をやってのけた直吉は、事業家としての名を一躍天下に示す。
鈴木の個人商店時代は終り、合名会社としての整備がなされた。資本金五十万円である。四十八万円を鈴木が、あと一万円ずつを直吉と冨士松が出資。
明治三十八年（一九〇五）、直吉は脇浜の寒村に出現した小林製鋼所に出資していたが、初出鋼に失敗し破綻した小林を引き受けることにし、神戸製鋼所と改称。製鋼は国家的事業と思い決めた直吉は、経営困難にも耐えたのである。大里製糖売却の利益は、折よく製鋼所を救い、五十万円で十トン炉一基、十五トンクレーン一台が増設される。
店員もふえ、店が手ぜまになったため、四丁目から三丁目に移転したのは三十六年のこと。店が大きくなっても、よねの生活のリズムは変らなかった。

「神サン参りは、欠かさんかった人です。毎朝神棚と台所の荒神さんにサカキを供え、古いサカキはボンさんに言いつけて、海へほかしにいかしてました」

朝々仏壇の前では般若心経を唱える。

朔日、よねは俥宿からゴム輪の二人のり人力車を呼んで、長田・湊川・生田の三神社に参詣する。俥帳場は栄町四丁目の角にあり、いつも車夫が将棋をさして客待ちをしていた。

月の十五日は先代の命日で、墓参りに追谷の墓地へゆく。追谷は再度山への登山道の途中、もと移民収容所のちょうど裏山にあり、九鬼家が墓地替えをしたあとを鈴木家が買ったものである。墓地へはよく義一氏の母むらも同行した。

一日と十五日は決まって仏具磨きをボンさんにやらせた。そのほかヒマが出来ると小学生の義一氏は、よねの五目ならべの相手をさせられた。

「お家さんは、いつも二目ならべたらすぐに、義ちゃん、それやめんかいな、とこうですわ。ふつうは三目めで、やめんかいな、ですやろ。それが二目めで声がかかるから、何でも早手まわしのお家さんらしかった、といまは思いますな」

正月には、孫娘の千代子と同じように、お年玉をくれた。ある正月、なぜか反抗的になり、お年玉要りません、と言うと、

「要らんて、口で言いながら、義ちゃん、手ェは出てるやないか」

心中を言いあてられる。

海外に店員を派遣、ロンドン、ニューヨーク、ハンブルグに出張所が設置されるようになっても、鈴木本店で洋服を着るものはいない。角帯前垂れ姿で、取引先の商館に出入りしたのも、よねの洋服ぎらいの影響である。事務所を移り、机椅子になっても

「うちらは巡査やないんやで、なにも洋服にせんかてええがん」

頑張っていた。

鈴木商店で洋服着用第一号は、西川文蔵で、明治三十七年四月のある日、突然彼は英国仕立ての三つ揃えをむりなく着こなして店に現われた。店員たちはおどろいたのち、それぞれが見物にやってきた。西川の洋服着用のニュースは、よねの耳にもすぐ届いたが、よねは何も言わなかった。義一氏も長いよねとのつきあいで、よねがかげ口、うちわ話の類を口にするのを聞いたことがなかった。

店員の家族とは親交を深め、食べものの持ちよりの会を、女ばかりでよく開いたが、家庭争議、内緒ばなしは一切御法度であった。三味線を弾き、伊勢音頭をうたい、賑やかに遊びたのしむのが好きなよねでもあった。

「世話好きな人で、店員たちの結婚の世話をすると、式服一切を贈り(これは後に紬一反となる)、式場の手配から、新居まで決めてやる。わたしの母むらが、お家さんのためによう勤めてお気に入りやった」

しかし義一氏の母むらは、三十六歳で病没。むらはよねの実家の並びにある山本呉服店の娘であり、よねが冨士松と結婚させたのである。よねの嗚咽する姿をはじめて見た義一氏は、ショックを受ける。

冨士松の後添は、むらの妹のぶに決まった。

運命的飛躍

神戸高商を一番で出た高畑誠一が、校長水島銕也のすすめで、鈴木に入社したのは明治四十二年(一九〇九)。高畑は三井志望だったが、水島のすすめに従ったのである。

殆ど同時期に、鈴木はロンドン支店を創設、もと居留地商館イリス商会の番頭であった芳川筍之助を支店長として送っていたが、直吉はそこへ若冠二十七歳の高畑を抜てき、送りこむ。

「――高畑が神戸を経ったのは大正元年(一九一二)十一月。釜山・シベリア・ベルリンを経てロンドンへ。約一か月の長旅だった。支店はロンドンシティの中心の通りに面した五階建ビルのみすぼらしい一室。芳川と事務引き継ぎをすませたあと一人とり残された高畑は――」

(『海鳴りやまず』第二部)

彼は責任の重さを痛感したことだろう。当時ロンドンに駐在員をおいていた商社は、三井物産、高田商会などわずかなもので、高畑はそこで人の倍働け、という直吉の指示通り動き、まもなく三国間貿易という新しい商法を提言し、直吉をおどろかせる。イギリスから日本へ銑鉄ほかを運んだ船の帰路、空船にするのはムダであるとし、東南アジアで米を積みヨーロッパで売るのだ。誰でも思いつくことだが、これも世界的規範のしかも正確な情報がなければ、成し得ぬことだ。高畑は見事な情勢分析力で成果をあげる。

大正三年(一九一四)運命の第一次世界大戦が勃発した。日本経済は不況のどん底にあり、経済界は苦境にあえぎ、国の財政は対外バランス十一億の赤字を抱え、破産状態にあった。こういう時期直吉は各国駐在員に、鉄をはじめとするあらゆる軍需品の一せい買い占めを指令。直吉の決定を人々は狂気の沙汰と笑った。ロンドンの高畑は、カンに頼る商法を廃し、正確な経済分析による判断から、直吉に命令されるまでもなく、一足早く、鉄、砂糖、小麦など手当り次第買いあさり始めていた。開戦後半年で、商品は元値の二倍に暴騰、わずかの期間で鈴木は、一挙に一億数千万円を得た。まことに戦争とは、あらゆる物の値段をつり上げるものであった。

『大蔵省昭和財政史』に

「鈴木商店とはなんであるか、それは第一次大戦中、世界をまたにかけて一番多く投機をやった大商店であった。それによって得た大資本をもっていろいろ大事業をやり一つの新興コンツェルンを形成した」

と記載されているように、大戦を好機として全力をあげた直吉のカンはやはり尋常一様のものではない。

大正六年(一九一七)秋、鈴木の総帥として、意気いやが上にも高らかであった直吉のもとには、分秒きざみで各国に派遣した社員から情報が入り、そのころ政府首脳や新聞社も鈴木に小麦などの商品情報を聞きにくるほどであった。

直吉は、意気にまかせロンドンの高畑に「天下三分の宣言書」と後に言われる書簡を送っている。

――この戦乱の変遷を利用し、大儲けを為し、三井三菱を圧倒するか、然らざるも彼らと並んで天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也、小生共是が為め生命を五年や十年早くするも縮少するも、更に厭う所にあらず――

このときの直吉の経営手腕は、たしかに、〝日本の企業経営史上の一大驚異〟と後年の研究家が驚嘆するばかりの神業的冴えを発現している。世界大戦という商戦略には絶好の時期を利用したとはいえ、三井が伊勢松阪に創業以来三百年という年代をかけて到達した実績を、わずか二十年たらずで、直吉は駆け抜けてしまったのである。一種の天才であろう。また直吉は天才にありがちな奇癖も十分持ち合わせていた。

「金子直吉さんは、ボンさんの時代から、着物を裏返しに着たまま、外国商館でもどこでも使いにいって、お家さんが、いつでもこぼしてましたわ。困ったもんやな、言うて」

義一氏は、一時期直吉の鞄持ち兼用心棒として、行動しており、直吉の異風異形を知悉している。一年中破れソフト帽をかぶり、夏は氷のうを頭にのせて仕事をした。冬は冷え症の身体にカイロを巻きつけ、穴のあいた靴下を指摘されると、血色がよう見えて健康状態がわかってよろし、と返答する。

「食事をする時間が惜しい人でした。文字通り、流しこむ態の食事で、牛乳でハムを飲みこむようにして食べ、りんごをかじって終り、でしたな。日曜も祭日も働いてました」

私利私欲という点が、まったくなく、依然として借家住まいの直吉は、ただ主家のためを思い身を挺してした。

次の年、アメリカがイギリスについで、鉄材の輸出禁止を打ち出し、資源のない日本の重工業に恐慌を与える。朝野をあげ、騒然となっていた折、直吉は個人の力で日米船鉄交換契約を成功させる。その契約のため直吉が東京のモリス米大使に会うべく東海道線の車中にあるとき、神戸に米騒動といわれる暴動が起った。大正七年八月十二日夜のことである。

戦争による空前の好景気は、国の対外赤字財政を一挙にくつがえし、金貨の流入は債務国を債権国となし、大小の成金をも輩出させた。同時に物価がしきりに上り、購買力の乏しい細民は生活苦におびやかされるようになっていた。

七月二十五日一升三四・三銭であった白米が、二週間後には四四・三銭というように、毎日のように値上りし、ついには五十銭にも達してしまう。景気都市として人口流入も一段と激しく、住宅事情も悪化し家賃もまたたくまに二倍になった。

「――大開通一丁目、三角公園前の角の普請場の板囲いに、奉書大の貼紙が、何者かの手によって貼られてあった。＝生か死か、市民の飢え迫る、米価の大暴騰、市民よ起って奮え＝通行人はこの貼紙をみると、みな自分の気持を代弁してくれた思いで立ち停った」

（武田芳一『黒い米』）

八月十二日夕刻には、何ものかを期待しすぎた群衆が、湊川公園から多聞通を東へと進み、有馬道付近で三隊に別れ、本隊はまっしぐらに東川崎町のもとミカドホテル跡に移っていた鈴木商店に殺到し、火を放つ。

前年五月、某紙は鈴木が門司から米をノルウェー船に積みかえ、敵国ドイツへ輸出している、商売のためなら何でもする、という当時としては致命的かつセンセーショナルな記事を報道。この噂はたちまちのうちに広がる。記事は誤報であったが、「国賊スズキ」「買い占めのスズキ」の流言に類するものは、紙上に絶えず載せられ、鈴木が衆怨をかう素地は作られていた。

鈴木本店が焼き打ちにあうより一足先に、栄町四丁目の鈴木家旧宅が暴徒と化した市民に襲われ、家財道具を表の道に積み上げられて焼かれる。

首謀者とみられる中年の在郷軍人と名乗る男は、土足で旧宅に踏みこみ叫んだ。

「およねばばあを出せ！」

二、三の社員は勇敢にも両手をひろげて立ちはだかり

「社長はここにいません」

必死で食いとめた。このとき二階の一室によねはいた。

「どこへかくれたらええやろ」

よねは押し入れの襖を開けたりしたが、女中にとめられ、結局女中に手を引かれ、屋根づたいに裏の家の物干台までゆき、家の中に招じられた。

「えらいことですなあ、ムチャしよりまんなあ」

裏の家の主人に慰められながらも、家の近くにいるのは危険ということで、内儀の浴衣をかりて着替え、男衆につきそわれながら、同じ町内の西村旅館へ避難する。

よねは店焼打ちという非常事態にも、多くは言わず、千代子氏の顔を見ても

「焼いてどないなるというんやろな」

ひと言言い、あとは平常通りであったという。義一氏はちょうど外国へ行かされており、帰国して

「お家さんに挨拶にいった時も、焼き打ちのはなしは何もせんと、平然としとってやった」

立派というべきか。いうべきであろう。

よねと岩次郎、千代子は、この騒ぎが納まるまで、鳥取の三朝（みささ）温泉に滞在していた。

八月十三日東京から引き返した直吉は、三宮駅からの道の辻々に、自分への脅迫ビラが貼られているのを見て、難を避けるため中山手四丁目の柳田冨士松宅にとびこむ。以後三か月ほどは柳田宅の裏の洋館が鈴木商店幹部の会合場所となった。身重であった冨士松の二番目の妻のぶにとって、この事態は限度を越えた重さであり、秋、日本ではじめて流行した流行性感冒にかかり、出産のとき母子ともに死去した。十一月三日のことで、のぶは二十九歳であった。

直吉夫人とくは、葬儀場から柳田宅へ帰ってくるなり座敷に倒れ暫く病臥する。よねにとっても、のぶの死は手痛い打撃であった。

鈴木の、つまりは直吉の方針は一貫して国益と並列した商法であり、米の買い占めごとき小策に汲々とするものではなかった。むしろ政府に協力し、貴重な船舶のやりくりまでして、米価値下げに死力を尽くしたのである。

「なんで鈴木が焼かれんならんのや」

鈴木にかかわるものはみな怒った。

「信頼」の美しさ

大正七年十一月、第一次世界大戦の休戦条約が成立。ヨーロッパから遠く離れた神戸でも、祝いの行事が持たれたというが、商人たちは浮かれてはいられなかった。休戦パニックを心配する船成り金や関連企業家たちに、さしあたっての打開策は立たなかった。

直吉は、いつものカンで、他のものが弱気になったときこそ好機と、そのときもロンドンの高畑に商品情報を集めさせていた。だが高畑は、三井をしのぐ大企業に成長しても、相変らず旧式の合名会社、金子直吉個人企業といってよい体制に、危惧を抱いていた。ワンマン企業のもろさは、船成り金の例をみるまでもない。早急に合名を株式組織にし、株を公開、銀行以外からの資金を集めるのが急務だ。存念を本店の西川文蔵支配人に書き送っている。西川もまた高畑の意見に同感であった。ひろげるだけひろげた企業工場が、それなりの利益をあげるまでに成長していなかった。つぎ込んだ巨大な資金は動かず、いまは